

## 唱法再考

—固定ド存置、および移動ド代替案としてのヒフミ唱法復活の提案—

大 西 潤 一

(元 鈴峯女子短期大学)

### Score Reading Reconsidered: Maintaining the Fixed-Do Solfège While Replacing the Movable-Do Solfège with the *Hi-fu-mi* (numerical) Reading System

Junichi OHNISHI

#### Abstract

Many of researchers and practitioners have suggested that the movable-do solfège is the most preferable reading system; however, no consensus exists regarding music-reading systems, especially between advocates of movable-do (scale-degree) system and those of the fixed-do (note-name) system. Pianos and electric keyboards are widespread in Japanese homes; in families that own one of these instruments, children who possess absolute pitch tend to use the fixed-do system and not the movable-do system. However, the same do-re-mi syllables should not be used in both the fixed-do and movable-do systems. Therefore, important related questions are as follows. (1) Which system is preferable? Or are both the note-name and scale-degree systems necessary in music education? (2) If the same do-re-mi syllables should not be used in both the movable-do and fixed-do systems, what are the alternatives? Through addressing these questions, the present study suggests that children of primary school age or younger should use the fixed-do system; junior high or high school students should use the movable-do system. Moreover, as with the pitch-name system, the fixed-do system should be officially maintained, whereas the movable-do system should be replaced with the old *hi-fu-mi* (numerical) degree-name system.

#### 問題の所在

児童・生徒に音楽の学力を保障することが音楽教育者の責務であることは言を待たない。音楽科の学力とは、表現と鑑賞の活動を通し、認知的、精神運動的学力の形成を伴いつつ最終的に情意的学力の形成へ至るのが望ましいと考えるが、音楽を自力で楽譜から読み取り音として表現する学力、すなわち認知的運動的学力としての読譜力は、生涯にわたり音楽を愛好して行く上で必要不可欠な学力であると考えている。例えば、サークル活動での合唱、吹奏楽などの音楽活動や、鍵盤楽器、独奏楽器、声楽の個人レッスンなどの場で、読譜力は生涯にわたって音楽を愛好して行くための基礎力として役立つ。また、近年普及しているコンピュータ・ミュージックも、楽譜での入力ができるのと既存の楽曲はもとより自作曲や編曲作品の入力も容易であり、音楽の楽しみの場が広がる。学校で読譜の基礎力を培っておくことは重要である。

さて、読譜を行う上で、われわれは通常、何らかの「唱法」を用いて楽譜の音高（絶対的であれ相対的であれ）を符号（シラブル、音名あるいは階名）に変換し、声に出して歌ったり頭の中で歌ったりしてその音高を確かめて読譜しているのが通常であると考えられる。少なくとも音楽の専門的訓練を受けている者はほとんどの者がそうであろう。その際用いられる唱法には、音名唱法と階名唱法とがあるが、前者にはイロハ音名唱法、イタリア・フランス式と共通の固定ド唱法、ドイツ式音名唱法などが考えられ、後者には移動ド唱法、明治期に用いられたヒフミ階名唱法などが考えられる。多くの場合は固定ド唱法もしくは

は移動ド唱法のいずれかあるいは両者の併用によって読譜を行っていると思われる。

その移動ド唱法と固定ド唱法のいずれが良いか、あるいは両者の併用が可能なのかどうかといったことは、これまで幾度となく音楽教育学研究者や実践者の間で議論が行われてきた。その歴史の変遷については古田（1987, 1988, 1989, 1990, 1991, 1992, 1993, 1994, 1996, 1997）の一連の研究に詳述されているが、今日に至ってもなお統一の見解が見いだされていない問題である。本論文は固定ド唱法、移動ド唱法の優劣を決定する議論をすることを目的としていない。そうではなく、音名唱法、階名唱法の双方が音楽の学習者にとって必要であることを主張し、すでに普及してしまっている固定ド唱法を音名唱法の適切な手段と位置づけ、階名唱法には固定ド唱法と紛らわしい移動ド唱法を用いるのではなく、明治時代に普及していたヒフミ階名唱法が適切ではないかと提案するものである。その論理的根拠については、以下の論考において議論していくこととする。

本論文は以下のような構成をとっている。まず、古田の一連の歴史的研究や、著名な東川清一と三善晃との論争を総括することによって、これまでの唱法に関する議論から問題を焦点化する。そして焦点化された論点をもとにこの問題を再定義する。次に心理学的な観点から、実験データも参照しつつ唱法の問題を捉えなおす。さらにそれらに基づいて、固定ド唱法存置、階名唱法としてのヒフミ唱法の有用性について議論を導きたいと思う。

## 唱法問題の焦点

### 1. 歴史的視点（古田の研究より）

古田（1987, 1988, 1989, 1990, 1991, 1992, 1993, 1994, 1996, 1997）は、全10編から構成される論文を発表し、唱法の歴史の変遷を豊富な一次資料に基づき明らかにしている。本論文は歴史的研究ではないので、歴史的視点から唱法の問題を総括するためには古田の一連の論文を概括すれば十分であると考えられる。以下、年代別に唱法の歴史における変遷と問題を簡単にまとめる。

#### 【明治時代】

古田（1987）によれば、明治時代には伊沢修二によって、音名はイロハ、階名は「ヒー、フー、ミー、…」と定められ、「ヒフミ唱法」が階名唱法として広く全国の師範学校、中等学校、小学校で用いられていたということである。そして、井上武士の証言として、明治28年（1895年）に東京音楽学校で「ドレミ唱法」が階名唱法として導入され、明治40年以降に小学校に普及したと述べられている。

#### 【大正時代】

古田（1987）によれば、大正時代には、山本壽、青柳善吾、幾尾純らの唱歌教育実践者・研究者によって読譜や唱法に関する議論が始まるようになる。依然、唱法は階名唱法が中心で、固定ド唱法、移動ド唱法の議論や、階名唱法、音名唱法の是非が問われることはなかった。

#### 【昭和初期】

古田（1988）によれば、昭和の10年頃までの音楽教育界では、もっぱらドレミ階名唱法（移動ド唱法）についての議論が中心であった。昭和10年代初め頃は、「絶対音感」、「音名唱法や階名唱法」、「固定ド唱法や移動ド唱法」などに関する研究や議論が盛んであり、固定ド唱法を優れた唱法であるとした議論が少なくなかった。

#### 【昭和10年代】

古田（1988）によれば、昭和15年頃は、移動ド階名唱法が中心であったが、日本式イロハ音名唱法や、あドイツ音名唱法もあり、移動ド唱法や多様な音名唱法が使用された混迷期であった。

また、古田（1988, 1989）によれば、昭和16年4月から始まる国民学校芸能科音楽では、イロハ音名唱法と高学年でのドレミ階名唱法の併用が文部省によって決定されていた。その背景には、昭和10年代にブームとなった絶対音感早教育を願う一部音楽教育者の願いと、国防のため雑音（軍用機の音）の聴き分け能力を子どもに教え込みたい軍部の思惑とがあった。

#### 【昭和20年代と昭和30年代】

戦後はいち早く、戦時中のイロハ音名唱法ならびに絶対音感早教育への反省から、移動ド唱法教育への回帰が見られる（古田, 1990）。昭和22年の学習指導要領試案では、多くの音楽教育者の意見を取り入れ、移動ド唱法の採用が原則とされた。また、昭和33年の小学校、中学校の学習指導要領でも移動ド唱法が

原則とされ、これは今日の学習指導要領でも継承されている。

#### 【昭和 40 年代】

昭和 40 年代になると再び固定ド唱法と移動ド唱法の適切性を比較する議論が再燃する（古田，1991，1992）。音楽教育学研究者の立場、現場教師など実践者の立場、音楽学者の立場、心理学者の立場など多様な立場から、読譜指導のあり方や、固定ド唱法、移動ド唱法の適切性についての意見など多様な論説が発表された。

そのうち、別宮（1970）の言う、固定ド唱法か移動ド唱法という問いは、階名唱法か音名唱法かという問いと、ドレミを階名として用いるか音名として用いるかという問題とが絡まっている、という指摘は注目に値すると筆者は考える。

一般教育では階名唱法（移動ド唱法）、専門教育では音名唱法（固定ド唱法）を奨励する案、固定ド唱法と移動ド唱法を共存させる案、移動ド唱法奨励案、固定ド唱法奨励案が主に提起されている。

#### 【昭和 50 年代】

古田（1993）によると、昭和 50 年代には、繁下他の「唱法と聴感覚」に関する調査があり、また、著名な三善晃と東川清一の唱法論争があった。論争について後述する。さらに古田（1996）によると、古田は音楽教育学 13 号に発表したという論文（註：実在しない。他の論文の誤りと思われる。）において、教員養成大学の大学生を対象に、聴音能力や読譜能力について実態調査や追跡調査を行っている。

#### 【昭和 60 年代】

古田（1996）は、日本音楽教育学会第 18 回大会（1986 年）（註：第 17 回の誤り）課題研究「唱法」について詳述しているが、その内容は後に音楽教育学誌に収録されている（沢崎 1986、；法岡，1986；古田，1986；北山，1986；東川，1986；および大月，1986）。

また、古田（1997）は、日本音楽教育学会第 18 回大会（1987 年）における 2 回目の発表を詳述しているが、これも後に音楽教育学誌に収録されている（マクレガル，1987；垣内，1987；西沢，1987）。

最後に古田は、自身の研究の総括として研究から得られた知見をもとに意見をまとめているが、ここでは省略する。

#### 【歴史の総括】

以上、古田の一連の研究を総括すると以下のことが見えてくる。

- ① ヒフミ唱法からドレミ唱法に変わったとはいえ階名唱法が普及していた明治時代。
- ② 略譜・本譜論争のような議論はあったとはいえ階名唱法が相変わらず普及していた大正時代。
- ③ 移動ド唱法中心から音名唱法の導入、一部音楽教育者の思忖と軍部の要請を伴う、絶対音感教育および音名唱法への傾倒があった昭和の戦前・戦中期。
- ④ 移動ド唱法が復活した戦後の昭和 20 年代から 30 年代。
- ⑤ 移動ド唱法支持、固定ド唱法支持をはじめ多種多様な意見が述べられた昭和 40 年代。
- ⑥ 大規模な実態調査や誌上論争を含め、唱法について活発な議論が繰り広げられた昭和 50 年代。
- ⑦ 音楽教育学会の課題研究で唱法が本格的に取り上げられ、学会レベルで大きな話題として取り上げられた昭和 60 年代。

#### 【考察】

歴史的には、当初は階名唱法（はじめヒフミ唱法、のちに移動ド唱法）が広く用いられ、何の問題もなかったところに固定ド唱法が表れたのが諸悪の根源であることが容易に見て取れる。このことは、多くの研究者が指摘するように同一のドレミという記号（シラブル）を音名（註：本論文では固定ド唱法は音名唱法であるとの立場に立つ）にも階名にも用いるという不合理に問題があるためである。音名を戦時中にそうであったように日本式のイロハ音名に改め普及しておけばこれほど移動ド・固定ド問題が深刻になることはなかったと思われる。音名唱法と階名唱法のどちらが良いかという点については、階名（移動ド）唱法優位論、音名（固定ド）唱法優位論、両唱法併用論、本論文では引用しなかったが、一般教育では階名（移動ド）唱法を、専門教育では音名（固定ド）唱法を用いるべきという論、その逆に、逆に一般教育では音名（固定ド）唱法を、専門教育では階名（移動ド）唱法を用いるべきという論がある。

#### 2. 三善晃と東川清一との論争

ここでは、三善晃と東川清一との著名な唱法論争を振り返ることによって、何が問題であったのかを明

らかにする。まずは論争の発端となった三善（1979a）の論文であるが、中に以下に引用する記述がある。

「固定ドの採用は時間の問題だ、と文部省担当官も言う。現在、原則的に移動ドにしてあるのは、絶対音感を持っている大部分の子供が調性音楽を歌うのに適しているからだと言われる。しかし、調性音楽のほとんどが広い意味での転調（一時的内調使用）をするのだから、途中でキーを乗り換えねばならない。この判断（知的）と転換（生理的・時には同音高を違う名で続けて歌わねばならない）の負担を考えれば、調性音楽に適しているとは到底言えまい。絶対音教育というと何か特殊なことのように思われているが、子供にとってはむしろ自然なこと。初めからドをドと呼んでいれば、それ以外にないのだから（たった12）、これほど楽なことはない。時間の問題というのは、絶対音を持った子供が増えてくるまで、という意味だろうが、それまでは義務教育課程の原則を、不合理なものに定めておくというのも、見識ない話である。少なくとも、固定ドのすすめ、を一つの段階として考えるべきであろう。」（三善、1979a、p.36）

三善は①転調の際の移動ド唱法における読み替えの負担、②絶対音感教育に固定ド唱法が向いていること、を理由に固定ド唱法を支持する論を展開した。これに東川（1979a）が反論した。東川は、三善が固定ド唱法を支持する理由が2点あると指摘し反論した。第1点として東川は、三善が固定ド唱法は「読譜がずっと楽」であるとし、「同じ音符がいろいろな『階名』で読まれ」たりするというように移動ド唱法は「不合理」があると「告発」していると指摘している。それに対し東川は、決定的に重要なのは、「移動ドの階名は固定ドのそれと違って音（符）名ではない」と指摘し、移動ドには確かに負担はあるが、三善の言うように不合理ではないと指摘している。（東川、1979a、pp.54-55）

第2点は、三善が「絶対音教育」に固定ド唱法が向いていると述べている、と指摘している。そして、「確かに絶対音教育が目的であれば、移動ドは使い物にならない。」とし、「だからといって、それが直ちに、固定ドの採用を文部省に要求するための根拠とはならない。」とし、音楽科教育に絶対音感教育を採用すべきかどうかは、レヴェスの『音楽心理学入門』に書かれている、絶対音感がきわめて少数の者だけが生得的にもつ才能であることが否定されない限り、きわめて危険である、と論じている（ただし、現在では絶対音感は、幼児期の訓練によってかなり多数の者に獲得可能な後天的能力であることが示されている）。

このように東川は、①移動ド唱法の階名は固定ド唱法の音名とは違うので、負担はあろうが不合理ではない。②絶対音感レヴェスの言うように生得的なものなので一般教育で教育するのは危険である。という2点から三善に反論した。東川の反論に対する三善（1979b）の反論は以下のとおりである。三善は、東川が移動ド唱法の「不合理」性を否定する証拠に挙げた「『モデュレーター』も『解釈譜』も、『内部調出現のたびにキーの乗りかえをしなくてはならない』点で『負担』を別の記号でやっているだけ」であると指摘した。そして、具体的に譜例を挙げたうえで、「このような、簡素で自然な旋律（ミレド）すら、同一音をこのように『読みかえ』ながら歌わせねばならないのが『合理』であり『基礎的な音楽教育』であるならば、小生などは『音楽』と縁を切るより他ないと思います。」と激しく述べ、改めて移動ド唱法の負担の重さを強調した。（三善、1979b、p.48）絶対音感については、全国の小中学校の教員と話した経験から、固定ド唱法を採用するクラスや絶対音感をもつ子どもの増加を実感していると述べている。さらにこのことを文部省の担当官にすると「『たしかに、そういう時代が来つつあるのですね』という感想とともに『固定ドの採用は時間の問題だ』と言われたわけです。」と述べ、絶対音感という固定ド唱法の土壌が広がるという見通しの中でその推奨を行っているという趣旨を述べている。（三善、1979b、p.49）

東川に対する三善の反論は①移動ド唱法には転調時に初学者には耐えがたい負担が生じる場合があること、②絶対音感をもつ子どもの数は増えつつあり、固定ド唱法の土壌が今後広がっていく予想があること、という2点である。

三善の反論に対して、東川（1979b）は再度反論を行っている。引用しつつ趣旨を記述すると以下のようになる。移動ド唱法の負担に対しては、「たとえ固定ドでうたうにせよ、いや聴くだけにせよ、心の中の読みかえは避けられないし、その『負担』なしには、転調に固有な音楽の効果は説明できない。要するに。転調そのものが要求する『負担』を移動ドに起因する「負担」のなかに勘定してもらっては困るのである。」（東川、1979b、p.63）

「トニック・ソルファ法には、氏のいわれる『内部調』を半音階的变化音としてとり扱うという方法もあるのである。」「こうして半音階的变化音としての解釈が移動ドの『負担』を軽減するのに大いに役立つことはあきらかである。」（東川、1979b、p.64）と述べている。

また、絶対音感については、「少なくともレヴェスらにたいするもっと、説得的な反論がきかれるまでは、私はあいかかわらず主張しつづけるしかない。クラスの生徒の90パーセント以上が落ちこぼれて不思議はない絶対音教育など、せめて公教育ではやめていただきたい、と。」(東川, 1979b, p.64)と述べている。

ここで東川は、転調時の負担は、①たとえ聴くだけであれ、転調の際には心の中で調の転換を感じ、「読みかえ」の「負担」を負って転調の音楽的効果を味わっているのであって、転調における「負担」はたとえ固定ド唱法であっても避けられないこと、また、内部調を半音階的变化音として扱えば、転調における移動ド唱法の「負担」は大幅に軽減できること、の2点を指摘している。また、絶対音感については、②レヴェスら音楽心理学者の古い研究成果を相変わらず引用するのみで、三善の経験に基づく絶対音感の広がりへの感触を無視している。

三善の再反論がないまま、東川(1979c)は、論争を締めくくる論文として、トニック・ソルファ法を概観するとする論文を発表しているが、論争そのものとは無関係なので、ここで論じることは省略する。

### 【考察】

著名な三善と東川の論争は、三善が一步引いたことで一見、東川の勝利のような印象を与えるが、そうではない。この論争は結局未決着のまま終了を迎えたと筆者は判断する。争点の第1点は、移動ド唱法が合理的か不合理か、また移動ド唱法に負担が多いか少ないかである。三善は、移動ド唱法は不合理かつ負担が多いとし(ただし合理、不合理の判断は反論では曖昧である)、東川は合理的かつ負担はあるが内部調を半音階的变化音として処理することによって負担の減少を図ることが可能とした。筆者は、半音階的变化音として処理すれば負担が少なくといっても、その方法の習得がまた負担であるし、内部調出現のたびに逐一何らかの処理が必要な移動ド唱法は、固定ド唱法より負担が多いのは否めないという点で、東川は三善に反論できていないと考える。しかし、移動ド唱法によって調性の変化が固定ド唱法よりも確実に意識化できるというのは移動ド唱法の長所である。この点では、ある程度の負担を負ってでも移動ド唱法を用いる価値はあるということになる。次に第2の争点、絶対音感であるが、東川の言うように、絶対音感教育が公教育で必要かどうかは確かに疑問の残る点であろう。しかし、東川の言う、レヴェスらの研究成果はかなり遅れたもので、現在では絶対音感は先天的な才能もあるが、多くの場合幼児期からの音楽の訓練によって獲得可能な能力であるとみなされている。音楽の訓練を受けていない児童でも、小学校に入ってから、音楽の授業での音高練習を積むことで、幹音のうちいくつかの音高の絶対音感が、ある程度まで獲得されるようになることを報告した研究もある(大西・河邊, 2011)。従って、東川の言う、絶対音感是天性のものであって小学校で教えても意味がないという論は完全に間違っている。

### 3. 問題の焦点化

ここまでの考察で見えてきたことから問題を焦点化すると以下の通りである。わが国では当初、移動ド唱法が受け入れられていたが、器楽の充実に伴い絶対音感の普及と固定ド唱法普及があったのであって、音名唱法、階名唱法には一長一短があり、容易に優劣は決められない。ドレミというシラブルを音名にも階名にも用いるのは間違っている。

### 問題の再定義

従って、問題を再定義すると以下のとおりである。

- ① 問題は、移動ド唱法と固定ド唱法のいずれが良いか、ということではない。
- ② 問題は、階名唱法と音名唱法のいずれが良いか、もしくはいずれも必要であるか。いずれもひとつであるならどの発達段階でどちらの唱法を良いか。
- ③ ドレミというシラブルを音名にも階名にも用いるのが不適切であるなら、音名と階名とでどのようなシラブルを使用するのが適切であるか。

### 心理学的な観点

本章では、特に認知心理学的な観点から、唱法の問題を捉えなおし、適切な唱法のあり方について知見を得ようとする。

梅本(1970)は、「唱法の問題に関係する心理学の問題の第一は命名効果あるいはラベリング labeling の効果に関するものである。」とし、その機能を①対象を代表し、外界からの刺激を経験内容としてとど

めておく機能、②知覚の分化を進め、記憶の安定性を増加させる機能、③思考において意識内容を明確化させる機能、に整理している。音楽に適用させると、①は、カテゴリー的に知覚される楽音に命名することによって、「音楽に用いられる九十余りの音が整理され、音階という単純な体系に統合されて把握される」ことを意味し、②は、音名や階名で旋律を歌うことによって、「旋律の記憶に促進的な効果」があることを意味し、③は、「音楽教育において、旋律のもつ意味を的確に把握させ、各音の役割を理解させるためには、表現においても鑑賞においても音名を学習させることが必要である」ということになる。(梅本, 1970, pp.30-32)

#### 【考察】

梅本の論をヒントに筆者なりに考察すると、唱法の意義は第一に、音に対し符号を割り振ることによって、音の同一性や相違性を確認できることにある。すなわち、西洋音楽で使われる音は、基本的に離散ピッチを採用しており、「きらきら星」に例えれば、「ドドソソララソ」の冒頭ドドの2音は、決して同一の周波数で2音とも演奏されることはないが、同一の「ド」という符号を割り当てられることによって同一カテゴリーの音であることが認知され、音の同一性が確認されるのである。また、「ド」と「ソ」は違う符号が割り当てられることによって音の弁別が促進され、異なるカテゴリーの音であることが確認されるのである。音楽経験が豊富な者は、音楽情報を処理する際、音高を言語的符号(音名や階名)に変換して処理し、音高や音程の判断を行ったり、音高情報の記憶を行ったりできるので(三雲, 1990)、言語的符号(音名や階名)は、音高情報の判断や記憶、それに基づく音楽的思考などの認知的処理に役立つと考えられる。そこに音名や階名などを離散ピッチに割り当てる唱法の第一義的意義を心理学的観点から認めることができる。

それでは移動ド唱法と固定ド唱法の問題は心理学的にはどのように考えたらよいのであろうか。筆者の考えでは、まずこの問題は、階名唱法と音名唱法の比較の問題として捉えなおす必要があると考える。音名唱法は、A=440Hz付近に調律された、おそらくは平均律を想定し、西洋音楽で使われるオクターブ内12音に対して言語的符号を1対1または多対1関係で割り当てる方法である。全12音それぞれに固有の符号がある場合は1対1、いわゆる「ハ調読み」のようにFとF#をとともに「ファ」と呼び、音高のみを変化させて歌う場合は多対1関係で符号を割り当てることになる。この唱法は、絶対音感を保有していれば便利な唱法であるが、他にもピアノなどの器楽では便利なので、ピアノを幼児期から習っている多くの子どもたち(そうしてそのまま育ってしまった大人たち)はある程度の絶対音感と音名唱法(固定ド唱法)を習得してしまう傾向にある。楽譜を読む際、高音部付表の下第一線は常に「ド」であり、各線間の音高も一義的に決まるので音高がポップアップ的に浮かぶので譜読みが大変速いという特徴がある。従って音楽の初心者に適している。

一方階名唱法はどうか。これは音の対主音関係によって、長調であれば主音「ド」との関係、短調であれば主音「ラ」との関係で階名が決定する。心理的には「階名スキーマ」や「調性スキーマ」の発達を促すものであり、スキーマに従って音と階名との関係が自然にわかるようになり、調性感が発達するのである。なお、絶対音感保持者は調性感がわからない、すなわち「調性スキーマ」がない、というのは全くの誤解であり、音名唱をしていても、絶対音感があっても、表現や鑑賞などの音楽活動を通して調性感は発達するものであるが、筆者(絶対音感保持者)の自己観察では、どのような調でも階名がすぐわかるという意味での「階名スキーマ」は筆者には乏しい感がある。その反面、階名で譜読みができるようになるにはある程度訓練が必要であるし、転調の際の読み替えが自在にできるようになるには音楽理論や和声学の知識が必須である。

なお、固定ド唱法と移動ド唱法のように、音名と階名に同じドレミというシラブルを使用し、児童生徒に混用させるのは、心理学的観点から見ても間違っている。これは、心理学実験からも判明している「聴覚的ストループ効果」というものがあるためである。ストループ効果とはもともと、赤い文字で赤と書かれた文字の色を赤と答えるのは速いが、赤い文字で青と書かれた文字の色を赤と答えるのは反応速度が遅くなるといった現象をさす。音では、音楽的音高の同定に対し、同定すべき音高(たとえば「C」)が、その音高と一致しない音名(たとえば「ソ」)で歌われると、同定(その音の音名を「ド」と答えること)が不正確になり、反応速度も遅くなるという現象である(Zakay, Roziner & Cen-Arzi, 1984; 大串, 1999; 宮崎, 1999)。従って、固定ド唱法に習熟した者が移動ド唱法の学習を強いられたり、あるいはそ

の逆を強いられたりすることは、心理的に強いストレスと混乱を生じるので、避ける必要があるのである。

## 総合考察

本論文は、移動ド唱法、固定ド唱法の両唱法が入り交り、いまだ統一の見解が見いだされていないわが国の唱法のあり方について、一つのあり方を提示しようとするものである。本論文がわが国の唱法に関する問題として特定したのは、①音名唱法、②階名唱法のいずれか／いずれも、が適切であるか、②ドレミというシラブルを音名と階名とで共用するのは間違っている、ということであった。

①については、幼児期、小学生のころは音名唱法、中学生に入ってから階名唱法が適切であると考えられる。なぜなら音名唱法は簡単であること、階名唱法には音楽理論などある程度理論的知識が必要で、相応の理解力がある年代でないと思われるからである。②については、広く普及している「固定ド唱法」を正式な「音名唱法」として認め、階名唱法には、明治期に用いられていた「ヒフミ唱法」を復活させて採用することが適切ではないかと考える。階名唱法に従前の「移動ド唱法」、音名唱法に「英語音名唱法」という案が提案されることがあるが、これは、「移動ド唱法」の立て直しと「英語音名」の普及、という、2重の負担を現場の教員や子どもたちに強いることになるので望ましくないと考える。小学生までは固定ド唱法で歌い演奏し、中学生からは1b1#程度の曲をヒフミ階名唱で視唱に慣れさせる指導を行うことを提案する。

## 引用文献

- 別宮貞夫（1970）「専門教育はなぜ固定ドが多いか」『音楽教育研究』50巻，pp.64-71。
- 古田庄平（1986）「唱法としての〈固定ド〉と〈移動ド〉の問題」『音楽教育学』16巻，pp.98-103。
- 古田庄平（1987）「我が国の音楽教育における読譜の歴史的な変遷についてⅠ：〈固定ド〉と〈移動ド〉の音感と唱法の問題を根底に」『長崎大学教育学部教科教育学研究報告』10号，pp.33-47。
- 古田庄平（1988）「我が国の音楽教育における読譜の歴史的な変遷についてⅡ：〈固定ド〉と〈移動ド〉の音感と唱法の問題を根底に」『長崎大学教育学部教科教育学研究報告』11号，pp.21-34。
- 古田庄平（1989）「我が国の音楽教育における読譜の歴史的な変遷についてⅢ：〈固定ド〉と〈移動ド〉の音感と唱法の問題を根底に」『長崎大学教育学部教科教育学研究報告』12号，pp.59-69。
- 古田庄平（1990）「我が国の音楽教育における読譜の歴史的な変遷についてⅣ：〈固定ド〉と〈移動ド〉の音感と唱法の問題を根底に」『長崎大学教育学部教科教育学研究報告』14号，pp.59-68。
- 古田庄平（1991）「我が国の音楽教育における読譜の歴史的な変遷についてⅤ：〈固定ド〉と〈移動ド〉の音感と唱法の問題を根底に」『長崎大学教育学部教科教育学研究報告』16号，pp.29-38。
- 古田庄平（1992）「我が国の音楽教育における読譜の歴史的な変遷についてⅥ：〈固定ド〉と〈移動ド〉の音感と唱法の問題を根底に」『長崎大学教育学部教科教育学研究報告』18号，pp.35-50。
- 古田庄平（1993）「我が国の音楽教育における読譜の歴史的な変遷についてⅦ：〈固定ド〉と〈移動ド〉の音感と唱法の問題を根底に」『長崎大学教育学部教科教育学研究報告』20号，pp.43-57。
- 古田庄平（1994）「我が国の音楽教育における読譜の歴史的な変遷についてⅧ：〈固定ド〉と〈移動ド〉の音感と唱法の問題を根底に」『長崎大学教育学部教科教育学研究報告』22号，pp.65-76。
- 古田庄平（1996）「我が国の音楽教育における読譜の歴史的な変遷についてⅨ：〈固定ド〉と〈移動ド〉の音感と唱法の問題を根底に（佐伯重幸教授退官記念）」『長崎大学教育学部教科教育学研究報告』26号，pp.77-90。
- 古田庄平（1997）「我が国の音楽教育における読譜の歴史的な変遷についてⅩ：〈固定ド〉と〈移動ド〉の音感と唱法の問題を根底に」『長崎大学教育学部教科教育学研究報告』29号，pp.25-31。
- 垣内幸夫（1987）「日本伝統音楽における「口唱歌（くちしょうが）（ソルミゼーション）」について」『音楽教育学』17巻，pp.38-43。
- 北山敦康（1986）「サクソフォニストの音楽的聴覚に関する調査」『音楽教育学』16巻，pp.104-109。
- マクガレル，L.M.（1987）「諸外国における唱法の状況」『音楽教育学』17巻，pp.33-37。
- 西沢昭男（1987）「調感覚に基づく相対音感の重要性について—「移動ド」「固定ド」をめぐる—」『音楽教育学』17巻，pp.44-48。

- 三雲真理子（1990）「メロディの符号化と再認」『心理学研究』61巻, pp.291-298.
- 宮崎謙一（1999）「音楽的音名反応とシラブル名藩王にみられる干渉効果—聴覚的ストループ効果に関する一実験—」『日本音楽知覚認知学会 平成11年度秋季研究発表会資料』pp.7-14.
- 三善晃（1979a）「子供の可能性を奪うもの—義務教育における音楽教育の諸問題」『音楽芸術』37巻1号, pp.34-37.
- 三善晃（1979b）「合理の不合理—東川さんへのお返事」『音楽芸術』37巻4号, pp.48-49.
- 法岡淑子（1986）「『移動ド・固定ド』問題に関する教育現場の実態—小・中学校教師に対する調査を通して（予備的研究）」16巻, pp.92-97.
- 大串健吾（1999）「音の高さと単語の意味の認知的干渉—聴覚におけるストループ効果—」『日本音響学界 平成11年度秋季研究発表会講演論文集』pp.563-564.
- 大月玄之（1986）「望ましい唱法の条件と現実的選択の視点」『音楽教育学』16巻, pp.116-121.
- 大西潤一・河邊昭子（2011）「児童の絶対音高同定能力についての実験的調査—3年生から6年生までの同定能力について—」『日本教科教育学会誌』第33巻4号, pp.31-40.
- 沢崎真彦（1986）「『固定ド』・『移動ド』唱法の変遷—わが国の音楽教育界の動きを中心に」『音楽教育学』16巻, pp.84-91.
- 東川清一（1979a）「固定ド反対!!—三善論文によせて」『音楽芸術』37巻3号, pp.54-57.
- 東川清一（1979b）「続・固定ド反対!!—三善氏の反論にこたえて」『音楽芸術』37巻5号, pp.62-64.
- 東川清一（1979c）「続続・固定ド反対!!—音楽教育方法としてのトニック・ソルファ法について」『音楽芸術』37巻7号, pp.68-73.
- 東川清一（1986）「とりあえず4つのことを主張したい」『音楽教育学』16巻, pp.110-115.
- 梅本堯夫（1970）「唱法についての心理学的考察」『音楽教育研究』50巻, pp.30-37
- Zakay, D., Roziner, I., & Ben-Arzi, S. (1984) "On the nature of absolute pitch" *Archive für Psychologie* No. 63, pp.163-166.